

私の想い

【正坂にて】



正坂いきいきサロン
代表
鈴木 重臣

転勤族の私たち家族四人が最後に住み付いたのが、菱田の正坂集落である。「地ごろ」になり切ろうとの思いで、住所は勿論の事、本籍まで此処に移した。そして「他人者（よそもの）」ながら終の棲家に決めて早三十年。年数だけ重ねたが、鹿児島弁が未だ理解出来ず「聞けない」「しゃべれない」の日々。懸命な努力の甲斐も無く、又しても遺伝に敗れたのだ。私の家系は語学に弱い。親の性だ。でもそんな呑気な事は言ってもらえない。皆とコミュニケーションを取らなければ一歩も前に進めない。それには集落の

行事には積極的に顔を出す事だ。行事が終了すると決まって反省会と称して「飲ん方」がある。この時がチャンスだ。最初の内は中々焼酎に手が出せなかったが、今では、ビールはコップ一杯、後は焼酎が良い。コミュニケーションは飲ん方の歴史だ。回を重ねる度に、異国語(?) 混じりの標準語で語りかけてくれる。私の顔を見て瞬時に異国語から標準語へと切換えてくれる。彼らの声掛け、彼らの親切は他人者の私にとって、どんなに嬉しかったか、どんなに勇気付けられたか計り知れない。この事は決して忘れてはならない事だ。十年程前猛烈な企業戦士であった私も定年を迎えた。サアこれからが、正坂の人達に恩返しをする番だ。どの様な形で、目に見える様な形で出来るのかを考えた。そんな折「難しく考える事なんてないんだよ。自分の出来る事を無理をしないですれば、それで充分だよ。」とアドバイスをもたらした。肩の力が抜け、身軽になったのを昨日の様に覚えている。「役」が回って来たら何事も経験と思いき快く引

受ける。これでやっと正坂の一員になったなあと思ったのは「自治公民館長」を二年間務め終わった時だった。当時正坂集落は百世帯を超えていた。他人者にとって最も難関である顔、名前、家族構成、住居が一致したのだ。一軒一軒、一人一人頭に叩き込むのは容易ではなかった。六十歳を越えた「じじい」にしては、良くやったと思う。その後は、もう恐い者知らず。言葉の壁も気にしない。「異国語が解らなくても何とかなる」を信じ、温かく親切に育ててくれた「此処正坂に骨を埋める」は間違っていないと確信している。正坂集落に、感謝！感謝！



正坂いきいきサロンの活動状況

編集後記

水を張られていた銀色の水田にも緑色が見え始め、しだいに色濃くなり、万物に躍動を与える季節となりました。

昨年度はふるさと納税制度により大変多くの方々から本町への寄付を頂き、国が進める「地方創生」に向けて、本町の魅力発信などに大きく寄与できたのではと考えます。

今回の三月定例会では、人口減少対策・産業の活性化・健康増進対策といった三本の柱を重点項目とした二十八年年度予算等を可決しました。地域間競争が一層激化していく中、これからも少子高齢化社会と人口減少という課題に果敢に取り組まなければなりません。本町の特性を再確認し、お互いに知恵を出し合いながら、「皆で創る大崎町」という気運がさらに高まればと思います。

(中倉 広文)

議会広報広聴常任委員会

委員長 稲留光晴 副委員長 諸木悦朗
委員 中倉 毅 委員 中倉広文
委員 神崎文男 委員 児玉孝徳

発行責任者 大崎町議会議長 小野 光夫